

いざ、知の冒険へ!

「永青文庫」に埋もれる宝探し

先端の研究者をナビゲーターに、熊本の知の世界を観光してみませんか!

熊本大学を中心に地元大学の教授や准教授が、専門の学問分野の内容を分かりやすく紹介する紙上の「科学館」「文学館」。それが「熊遊学ツーリズム」です。第21回のテーマは「永青文庫」。さあ「なるほど!」の旅をご一緒に…。取材・文/宮崎真由美

はじめの一歩

細川家から熊本大学附属図書館に寄託されている「永青文庫」の細川家文書のうち266通が、今年国の重要文化財に指定されることになりました。そのニュースをきっかけに、改めて永青文庫の存在を認識。それらの古文書群と日本史との関わりについてお聞きしたいことがいっぱい。興味津々、熊本大学文学部附属永青文庫研究センターを訪ねました。

知らない土地を旅するように、知らない情報世界を旅しませんか?



監修 / 公益財団法人肥後医育振興会

ナビゲーターは



熊本大学文学部附属永青文庫研究センター 稲葉 継陽 教授

歴史の研究とは、今までの研究を批判的に検討することによって可能性のある仮説を立て、その仮説に基づいて史料を調査・実証する営みです。理系の研究と変わりがありません。



Point 1

「永青文庫」とは?
国内でもまれな
歴史資料の宝庫

「永青文庫」の名の由来

永青文庫の「永」は、京都の細川家の菩提寺であった建仁寺の「永源庵」から取ったもの。「青」は、細川藤孝(幽斎)が織田信長に取り立てられ、京都の長岡京に初めて持った城の名前「青龍寺城」から取られているといわれます。

Point 2

永青文庫
研究センターの
研究活動の
4つの柱

国してから明治維新まで熊本を統治しました。細川家文書には、その250年にわたる政治経済、行政、法制、社会運動、医学、学、建築、思想、芸術文化など人間活動のほぼ全般におよぶ史料群が含まれています。
永青文庫所蔵の品々は、国宝や重要文化財を含む約6000点の美術工芸品と4万8000点の古文書ですが、そのうち熊本大学と県立美術館に寄託されたものを除いた品は、東京の文京区目白台の旧細川家屋敷跡内にある永青文庫に収納されています。
また、県が所有してきた古文書は現在、県立図書館に保管されています。

「初代藤孝(幽斎)から300年にわたって蓄積された歴史資料や書籍の全体像を明らかにして、学芸をはじめ市民、国民の共有財産にしていけることは、日本の歴史全体の理解のために極めて重要なことです」と、熊本大学文学部附属永青文庫研究センターの副センター長で専任教員の稲葉継陽教授は語ります。

平成21年に設置された同センターでは、4つの目標を掲げて研究活動を進めています。

1 未整理の史料も含めた総目録の電子データ作成。人名や年代、案件などさまざまな角度から簡単に検索できるように、詳細な電子データベースを進めています。

軽々とお城を乗せてゆく日傘 岩岡中正

最後に、街中の風景。ある日、上通の長崎書店の前を歩いているときのことです。お城へ曲がる角のところを、日傘の若い女性が二、三人にぎやかに歩いていました。明るい声に振り返ってみると、日傘の上に熊本城が見えました。白い日傘と黒いお城、それに青い夏空。この句ができたとき、私はあらためて熊本が好きになりました。

挨拶の傾き合へる日傘かな 篠原温亭

次に、日傘がすれちがうときの風景です。日傘の二人が出会った瞬間をとらえた句です。このお二人は和服でしょうか。なかなか優雅です。

日傘先づくるりと廻し歩きけり 小泉安壽子

まず、家を出る時の風景です。きつと楽しいことでの出掛けでしょうか。「くるりと廻し」に、ちよつと弾んだ心が見えます。



俳誌「阿蘇」主宰 熊本大学名誉教授 岩岡中正

めぐりくる季節の風に乗せて、四季の詩である俳句をお届けします

